き秋の日光を力とたのみて、僅かばかり花の咲いてゐる所などあつた、それが殊にあはれ深く感ぜられたといふ前置。

句の意は、水が涸れ〳〵になつてゐる、即ち小川小溝などの水は涸れて乾いてゐる、其處には花の咲き出てた草がある。彼の草花は、蓼であるか、あらぬか即ち蓼ではないのか、そんなら蕎麥の花であるか、但しは否歟即ち蕎麥でもないのかといふので、蓼しとも蕎麥とも何ともわからず、小草の無雜作に打まじり咲いてゐる、荒れたる野原の景色を歌つたのである。

追剝を弟子に剃けり秋の旅

秋の節に旅をしてゐる、追剝が出て來た、それを説服して、遂ひに自分の弟子入をさせて頭を剃つてやつたといふので、旅をしてゐる者は法師、日がくれても、本來無一物の僧であれば恐ろしき事もなく、とある山路へかゝつた、夜は次第に更けて行く、月はあるけれども道は木立の爲めに暗い、忽ち後から、コラと呼止める、見ると六尺有餘の大男、白刃を手にして近づく、身につけてゐる者一切差出せといふ、僧は聞ゆる有德者、よろしいと衣から頭陀袋から悉く差出す、何かの拍子で説法をする場になる、盜賊は涙を流して感入るそれては是れより善心に立歸り、吾が弟子となつて佛に仕へよといふので、即座に頭の髪を剃落し、これより主從否師弟となつて山道を起すといふ場ぢや。弟子に剃けりの中七字が巧みぢや。

冬

百姓に花瓶賣りけり今朝の冬

冬の立つた朝、百姓に花瓶を賣つたといふ丈けの事である。少しく此場合を想像して見ると、作者は都外れの村か山里などに住んでゐるので、冬の立ちて百姓が取入れも終り、やゝ農閑になつたので、作者の許へ遊びに來た。いろ〳〵の話があつて、床にある花瓶に百姓が目をつける。あれを賣つて戴きたいといふ。作者は秋もくれて、冬になり、よろづかれ盡し、懷もさびしいといふ時、然らばと惜しくはあつたがそれを賣つてやつた。百姓は實入のある時で、それを買つて喜ぶ。といふやうな場合で、花瓶を賣つたので、作者の心さびしく感ずるのと、初冬の情とが調和してゐるのである。百姓は實

入のある時だから、平生は花瓶などに目もくれぬ者が、此時花瓶をほしがつたといふやうな氣味もあるけれども、其點は深く見ず、唯だ賣つた人の心さびしい方に重きを置くべきである。

貧乏な儒者訪ひ來る冬至かな

此句は冬至即ち冬の最中の儀式の時の句で、冬至で團子など作つて、それを喰ひ業を休み遊んでゐる。其時に折ふし貧乏な儒者が自分の許を尋ねて來たといふので、矢張り前の句と同じく、儒者の貧にして、さびしげな趣と、冬の最中のさびしく寒き感じが一致するのである。

易水に葱流るゝ寒さかな

易水は支那にある川の名。刺軻といふ刺客が、秦に入る道に其處を渡つて、風蕭々兮易水寒、壯士一去復不還と悲歌をうたつたので有

名な所である。此句は其易水に葱が流れてゐる、寒い事であるといふので、歴史上にある易水をかり來りて、荆軻の秦に入る事蹟を想像せしめて、其歴史に作者が『葱流るゝ』といふ新らしき趣向を加へて、易水の歴史に新らしき生命を與へ、歴史とは自ら別種の趣を俱へしめたのである。即ち作者蕪村が、唯の小川に葱の流れて寒き景色を見、其川を易水と見立て、易水は斯樣に寒かつたのてあらう、いや斯樣な狀の易水も面白からうと思つて、斯く叙したまでゞある。併し唯の川に葱の流れて寒いだけでは格別の趣もないが、易水といふ歴史のある川に流して見ると如何にも趣が深くなつたのである。

ひとり來てひとりを訪ふや冬の月

唯一人で來て、唯一人住んでゐる人を訪ねた、折ふし冬の月が寒く照らしてゐる夜であつた。といふたので、これは作者が他人を訪ね

た場合か、又は他の一人者が同じく一人ものたる作者を尋ねた場合か。何れにも解せられて明かではないが、此句の主眼は、一人者が他の一人者を訪ふといふ所にあるので、佗しく心細く寒げな趣を冬の月に配して、其時の寒き心持を現したのである。

石となる樟の梢や冬の月

石となる樟とは、少しく判然せぬが、多分石に化する即ち化石をする樟といふのであらう。其處て此句は今其處に樟の木がある、其梢に冬の月が懸つてゐる、彼の樟は石に化する樟ぢやといふたので、石に化する樟といへば、若木てはなく非常な老木らしく思はれる。故に此句は大きな樟に、寒月の懸つてゐるといふ宏壯な景色で、大なる樟といへば面白くない所から、石となるなど作者の主觀を以つて現したのであらうと思ふ。或ひは樟の梢に寒月の凄く照らしてゐ

る所を見ると、非常に明く又寒いので、此有樣では樟も石にならうと感じたのを、斯く現したのかもしれぬが、それは餘り形容が過ぎるやうであるから、矢張り前解が、作者の意を得たものであらうと思ふ。

寒月や衆徒の群議の過て後

衆徒は叡山の衆徒など言つて、僧兵である。此句は冬の寒い月が空にかゝつてゐる。折ふし僧兵が集會して評議をしてゐたのが、すんだ後であるといふので、今迄は堂の中で甲論乙駁て、兵をあげ、山を下るべしなど論じてゐたのが、それがすんで、衆徒は何れも其居る所へ歸つた。あとはぴつそりと靜かになつて、評議のあつた堂の上には、寒い月が照してゐるばかり、といふ賑かな後のさびしい景色。物騷のあとの靜かさである。

初時雨眉に烏帽子の雫かな

初時雨は初めての時雨、それが降つた、其時に自分の眉には、烏帽子の雫がたれ落ちたといふのである。即ち初時雨に途中で出逢つたので、傘の用意もなき所から、烏帽子が用捨なく濡らされて、其烏帽子の雫が、眉にまで傳ふて來たのである。此場合は既に雨のすぎた後で、一寸の時雨の趣てあるらしい。其の一寸の雨が、初時雨の初の趣てある。

下戸ならぬこそ宵々の時雨かな

下戸ならぬとあつて、ならむとはないから、下戸てないのこそといふ方である。即ち下戸でないからこそ、毎夜々々の時雨が趣深く聞かれるのである。若し下戸であつて、酒を飲まぬ身ならば、時雨にも興は感じまいに、上戸てあつてこそ此の興が解せらるのである。

自分は上戸ぢや、それゆゑ此宵々の時雨を面白く聞くことであると言つたのである。初七即ち下戸ならぬこそは例の徒然草の詞を眞似て見たのである。

楠の根を靜かにぬらす時雨哉

楠の木の根の處を、時雨が靜かにぬらしてゐるといふので、楠の事なれば、時雨の降る時節にも葉がある、其葉を通じて、雨が根の處をもぬらしてゐるので、其根の處をぬらすのが靜かな雨の趣をよく現らはしてゐると思ふ。大きな楠に、しと〳〵と雨の降つてゐる景色。單に楠の時雨ならば感じが明かでないが、根を靜かにとあるので、如何にも靜かに淋しい時雨の或場合が明に目に浮ぶ。社の境内などの趣でもあらうか。

しぐるゝや長田が館の風呂時分

長田は長田忠致の事であらう。源の義朝が平治の戰に破れて、都を落ちて、近江路に入り、それより東して、長田忠致を頼つて行つた、忠致は表面之を喜び迎へ乍ら、風呂場で義朝を殺したといふ事は、誰れでも知つてゐる歴史である。此句は其歴史から思ひついたので、時雨が降る事ぢや、今は長田の屋敷の風呂の時分である、即ち義朝が長田の風呂に這入り、殺された時分であると言ふたので、長田の風呂に時雨といふ作者の構想を加へて、歴史に新しき趣を持たせたのである。義朝が殺されるといふ事と、時雨るゝ景色とが何處やら關係を持つてゐて面白い。

目前を昔に見する時雨かな

目の前を、昔の景色にして見せる、左樣な時雨であるといふので、時雨ふる頃は、木草も枯れさびて、萬事の冬ざれる頃、其處へ淋し

き時雨が降る。此天地は今の天地でなく、吾世を遠くはなれた昔の世界のやうな心地がすると主觀によつて時雨のさびしき趣を現したのである。上十二字の調子は張つてゐて面白い。

化さうな傘かす寺の時雨かな

化さうな傘を貸す、寺の人が貸す、折ふし時雨が降つたといふので、寺へ行つたか、又は山野など歩きつゝあつた時に、時雨に出會つて寺で雨宿りをしたのか、何れにせよ、寺から傘をかり、時雨をふせがうとした。所がお寺から借りた傘を見ると、紙の色も黑くなり、塵などかゝり、所々破れかゝつた、古い〳〵傘であつた。其趣は恰も何かに化けさうな傘である。左樣な傘を貸與へられて、おそる〳〵受取つてさして歸るといふ場合で、傘の化けるのみならず、其お寺も古寺か何かで、如何にも物凄さうに思はれる。世間でよく傘

のお化けなどいふ所から斯る趣向の出たのであらうが、兎に角に蕪村一流の振つた趣向で、時雨の心細き趣もよく現れて遺憾なしてある。此寺は蕪村御自身の知合であるとないとを問はずどもよい、又お寺にあやしの大黑かなんかゞ居つて貸したのぢやとすると一層おそろしい。

一渡しおくれし人に時雨かな

川の渡場で、自分は渡舟に乘つて既に川を渡つた。其時は時雨に逢はなかつた。然るに後を見ると、渡しに後れて向彼岸に立つてゐる人には、時雨が降りかゝつてゐるといふので、可なり大きな川で、一方の岸は時雨れ、一方の岸には日が照つてゐるといふやうな。景色ぢや。一寸氣が利いてゐる。

釣人の情のことはさよ夕しぐれ

川か池かで釣を垂れてゐる人がゐる。折ふし日は夕方で、時雨も降り出した。アノ釣人は時雨は降るし、日も夕方であるから、釣をやめ竿を收めて、歸途につきさうであるが、更らに釣をやめさうにもない。夕方であるのも、雨の來たのも、平氣で依然として動かず釣つてゐる。其樣が如何にも情がこはい、即ち雨や夕方にも恐れず强情張つてゐると言ふたのである。時雨の中に釣人の平然としてゐるなど一寸面白い。中七の情のこはさよの見立ても面白い。

木枯や何に世わたる家五軒

木枯の風が吹いてゐる。其處には家が五軒だけある。アノ家の中に居る人は、何を生業として此世を渡つてゐるのであらうかといふのて、人が世を渡るやうに言はず、世わたる家五軒と直ちに言放つた爲めに、此場合は家が目に入り、人は見えぬのである。即ち家は戸な

ど閉し、家のまはりにも人が居らず、人の居るか居らぬかもしれぬやうに、家だけ淋しく立つてゐる場合が明かに想像される、心細さびしき景色で何に世わたるの主觀で、其淋しさが一層明かに深く印せられるのである。

愚に堪よと窓を暗す雪の竹

愚を守り、愚で押通し、愚に耐えて居れと言つて、雪の竹が窓を暗くしてゐるといふので、竹に雪が積つて、それが窓近く撓み、其爲めに窓が暗くなつたのを、例の主觀で、雪の竹に心ある如く言ひ、彼れが斯く窓近く撓むのは、自分に對して、愚に耐えて愚を守つて居れとて斯くするのであると見なしたのである。雪積りて薄暗き窓の中に、世を遠くさけて、隱れてゐる人の境遇がありゝと見える。全く蕪村自身の境遇ぢや。

風呂入に谷へ下りるや雪の笠

風呂へ這入る爲めに、谷の方へ下つて行く、折ふし雪が降つてゐるので、笠を被つて行くといふのである。これは山家の百姓家へでも泊つた場合か、若くは溫泉場などの事か、或ひは山中の寺の一坊で、下谷の坊に風呂がわくといふ場合か、若くは大寺で、浴場が下谷にあるのか、其邊は何れともわならぬが、谷の雪を見つゝ、笠を被つて風呂へ行くといふ事柄が甚だ趣があると思ふ。

題七歩詩

雪折や雪を湯に焚釜の下

前置は、七歩詩を題するといふので、七歩の詩は、魏の文帝が、曹子建を殺さうと思つて、七足歩む間に詩を作れ、作れなければ殺さうとした、すると曹子建は七歩の間に詩を作つた、即ち『煮豆燃豆

箕。豆在釜中泣。本是同根生。相煎何太急』と作つた。譯して見ると、豆をば豆のからを燃して煮た、豆は釜の中で泣いていふに、お前と私とは元來同じ根から出來たものぢや、それにお前は自分を煮る事がどうして左樣に急しいのであるかと云ふので、文帝と建とは兄弟である所から、斯く歌つて自分を殺す事をやめよと諷したのである。文帝は其時は建を殺さなかつたのである。

句の意は、雪折れ即ち雪に折れた枝を釜の下へ入れて、焚いた、釜の中には雪を入れてゐる。其雪を此雪折で湯に沸かす事ぢやといひ暗に前置の心持を歌つたのである。

宿かさぬ火影や雪の家つゞき

大地には雪が積つてゐる、時は既に日暮、重き足を引ずり、重き笠を被つて、よち〳〵と行く、とある町に這入つた。先づ取つきの家へ

這入つて、一夜の宿を乞ふた。主人が居ぬからとて斷られた。次の家へ這入つた。又斷られた。それから二三軒這入つて頼んで見たが、何れも宿をかさぬ。これより阪を上つて、向ふの谷へ下られると、宿場があつて、旅籠が四五軒もある。こゝからは二里には近う御座る。其處までおいであれと言はれる。ガツカリすると同時に、足がいよ〳〵重さを感ずる。併し仕方がないので、うらめしく此町を過ぎる。阪を上りかける頃は、日は早やトップリ暮れて、雪あかりで漸く道をさぐるほどになつた。今來た町を顧みると、家毎に早や灯をつけて、それが戸のすき間や、障子などからもれて、外の雪に影を落してゐる。といふやうな場合でもあらうか。

宿かせと刀なげ出す吹雪かな

雪に風が加はつて、大さ手の如き雪は、巴十文字と散亂してゐる中

を、旅をしてゐる。日がくれて或所へ着いた。其處は宿場ではない。此先きの宿場へ行く迄には未だ可なりの道がある。足は重し、寒さは烈しく、身内は凍へるやうになつた。もう〳〵堪らぬ。先きへ行く勇氣もない。併し普通の百姓家で、宿をかすか貸さぬかわからぬ。貸しても貸さんでも貸して貰はねば此身が遣り切れぬ。其家へ飛込んで、どうか宿を貸してくれと言ふと同時に、腰なる刀を其處へガラリと投出して、かまちに腰をかけた。家の人は呆氣に取られて、しげ〳〵と自分の顔を見つめた儘、兎角の返事も出ぬ。といふやうな場合であらう。又此句は旅人自身即ち刀を投出した人の方から言つたのか、或は家の人、即ち投げ出されて呆氣に取られた方の側から言つたのであるか、何れとも判然せぬが、多分武士側から敘した方であらう。

朝霜や劒を握るつるべ縄

朝の霜のけしきが寒い。井戸で水を汲むべく釣瓶の縄を握つた。するとそれにも霜が置き堅く凍つてゐた。其握心地は、恰も劒を握るやうであつたといふのを、直ちに劒を握つたと切言したのである。

首くゝる縄切もなし年の暮

年の暮で、借金に追つめられ、どうする事も出來ぬ。斯樣に苦しくば、一層死んだ方がましである。首でもくゝりたい。併し首をくるゝ縄切れすらもない。左樣な素寒貧であるといふので、縄切のなかつたので仕合せ。但し縄切もなしは例の戯言で、滑稽の句ぢや。

賣喰の調度のこりて冬籠

賣喰ひは、財物を賣つて、得たる金で生活してゐるので、かせいで喰ふのでない。座して喰へば山をもくづすのたとへの如く、心細い

境界。其心細き境涯をつゞけて來たが未だ調度即ち器什が幾らか殘つてゐる。其殘る什器を力として冬籠をしてゐるといふので、此殘れる調度もどうせ今に賣られるので、如何にも心細き心持を叙したのである。

夜興引の袂佗しきはした錢

夜興引は、夜分に犬をつれて、狸などを獵する事である。其夜興引に出かけた、折ふし袂にはした錢即ち聊かの金を入れて居つた、其僅かの錢のある袂がわびしい事ぢやと言つたので、獵師などの、貧しくあはれな境涯をうたつたのである。

爐開や裏町かけて角屋敷

爐開は、冬が寒くなつたので、爐を開き火を焚いて暖を取るので、それを開く日に祝ひをして、或は茶湯など催したりしたのである、

此句は爐開をして祝ひをしてゐる家がある。其家は、或町の角にある屋敷で、而かも其屋敷地は裏通りの町迄占領してゐる、即ち裏町迄つきぬけてゐる屋敷ぢやといふので、富裕なる大なる屋敷である。左樣な大きな屋敷の爐開、さぞ賑かな盛んな事であらうと思ひやつたので、燕村が其處に招かれたのでもあらう。

木のはしの坊主のはしや鉢叩

鉢叩は空也上人の忌日、即ち陰曆十一月十三日から、四十八夜の間、鉦を鳴らし佛名を唱へ、或は竹杖にて瓢を叩き、夜毎に洛中洛外をめぐり施物を乞ふのである。

句の意は、鉢叩をしてゐる男のさまは、木のはしの坊主のはしぢやといふので、徒然草に『法師ばかりうらやましからぬものはあらじ、人には木のはしのやうに思はるゝよ』とあるので、其の人には木のはしなどゝ言はれる坊主、其坊主の未だはしてある。即ち木のはしの坊主より未だ以下である、左樣な姿形の鉢叩であるといひ、鉢叩のあはれげな樣をうたつたのである。

煤拂や調度すくなき人は誰

年のくれて煤拂をする、此時に調度即ち什器の少ない人は誰れてあるか、煤拂をする時に調度が多くては手數がかゝる、少なければ極めて氣樂無雜作である。其の調度少き人は誰れであらう、實は吾輩である。吾輩は貧しく佗びて生活してゐるが、煤拂の時には世俗の人の如く手數が掛らぬ、極めて單簡に終る、誠に氣樂な事であると、聊か清貧を樂んだ句である。尤も之れも徒然草に調度は餘り立派でなく、又た多くない方が見やすいと言つてゐる所から、燕村がそれに私淑したのであらう。

闇の夜に終る暦の表紙かな

暦は十二月晦日で終る、即ち闇夜が暦の大尾である。其闇夜に終る暦の表紙も闇であるといふので、暦の表紙が黑いのをば、暦の最終の闇夜の如くぢやと形容したのである。表紙の黑いのは、最初から黑色の紙を使用してあつたのか、又は一年中手に取つたゝめ、手の垢のつき且つはすゝけて黑くなつたのか、何れともわからぬが、兎角に表紙の黑いといふ事と闇夜で年が終るといふ事とで、年暮のさびしき情を現したのである。

小僧等に法問させて年忘

これは大寺の和尚さんの境遇で、年忘れ即ち此年を忘す爲めに催す宴を開いてゐる、其時に於て、小僧共に法問即ち宗教の問答をさせて、和尚さんは傍らで聞き乍ら年忘れの酒に醉ふてゐるといふのである。小僧の法問が餘興で、小僧が奇拔な事をいふ、それを面白がつて、和尚さん大口をあいて、呵々と笑ひ乍ら、盃を啣んでゐるのである。

埋火や遂ひには煑ゆる鍋のもの

埋火をして、それへ物を煑るべく鍋をかけて置いた。埋火のことなれば火力が強くない。併し鍋の中のものは、おしまひには煑ゆる事ぢやといふので、とろ〳〵火のさまである。何だか埋火を守り、鍋のぷつ〳〵と煑立つて來るのを餘處に、繪など書いてゐる蕪村の俤が目の前に浮ぶ。佗しき生涯である。

路地の闇親子よけ合ふ頭巾かな

これは說明する迄もない。唯だ闇い所で出合つて、それも狹いので、互に行當り、それから他人と思ひ避け合ふ所が滑稽なのである。尤

も頭巾を着てゐて、人相のよくわからぬからなのは勿論である。

都人に足らぬ蒲團や峰の寺

峯の寺に都人が泊つた、其時に蒲團が足りなかつたといふので、場合が少し明てないが、先づ想像して見ると、峰にある寺に知れる僧が居るので尋ねて行つた。話に夜が更けて、歸る積りであつたが泊つて行く事となつた。所が其寺は貧乏な寺で、客人を寐かす丈けの蒲團はない。併し和尚は快活な面白い人で、蒲團はないが一緒に寐ればよい、ナーニ大丈夫さ、少しは不自由をして見るがよからうなどゝいふので、一つの蒲團を二人で引合ふて寐たといふやうな場合か、これは侘しく寂しい方の解。今一つは峰の寺に法要でもあつて、多くの都人が參詣した、中には泊る者も多い、可なりの用意はあつたのぢやが、それでも蒲團が足りなかつたといふやうな場合で、先

づ講中の宿泊といふやうな賑かな場合とする解。又都人と云ひ峰の寺といふ邊から察すると、都の位高き人が、仔細あつて都を落ち、峰の寺へ忍んだ、といふやうなのかとも察せられる。場合が一寸明かでないが、要するに峰の寺の侘しさを叙した方であらうと思ふ。

ふぐ汁の我活きてゐる寢覺哉

ふぐ汁を喰つた、ふぐ汁を喰ふと中毒をして死ぬと傳へられてゐる。然るに喰ふて寐て目がさめると、自分の活きてゐるのを感じたといふので、鰒は喰つたが、若しや命を取られはせぬかと聊か恐ろしく思ひ乍ら寐て、其事が氣になつて、死んだ夢を見る、然るにうなされて起きて見ると、死んだのではなかつた。生きて居つた。やう〳〵身内のあぶらあせを拭き、安心をするといふやうな場合ぢや。我活きてゐるの中七が面白い。

入道のよゝとまゐりぬ納豆汁

入道は道に入つた人、即ち坊さん、それがよゝとばかりに納豆汁をまゐつた、即ち喰ふたといふのて、大きな坊さんが、したゝか納豆汁を喰ふてゐるやうな光景かと思ふ。

客僧の狸寝入や藥喰

藥喰は寒中に藥として獸肉を喰ふのて、昔しは獸肉は平生喰ふ事なく、寒中に藥として喰つたのみてある。

藥喰をした、其場合に恰も客となり泊つてゐる僧があつた、それが狸寐入、即ち寐たふりをして居つたといふのて、獸肉を養るなどは法師の最も忌む所、然るに家内の者がそれを養てゐる、僧は未だ寢てゐない、家内のものは寐てゐると思つて、何憚らずやつてゐる、僧も仕方なく此場合出ばを失つて、狸寐入をして、呼吸を殺して知

らぬふりを裝つてゐるといふやうな場合てあらう。實は僧も少々やつて見たかつたが、出るわけに行かず、匂ひに鼻をうごめかしてゐたかもしれぬ。

手取にやせんと乘り出す鯨舟

鯨舟は鯨を漁する舟て、其舟が鯨を見かけて岸から沖へ乘り出して行く、其趣は恰かも彼の大なる鯨をば手どりにせうとしてゐるやうぢや、といふのて、鯨舟の勇ましき趣をば、手取にしさうな勢ぢやと形容したのてある。舟人が鉢巻をシカと締めて、エイ〳〵聲を出して勇み出して沖に漕行く樣が目の前に浮ぶ。賑かな濱の趣てある。

鯨賣市に刀を鼓しけり

鯨の肉を賣る男が、市に立ちて、刀を鳴らしてゐるといふのて、鯨の肉を切るべき庖刀かなんかを持つてゐる。男の顏は黑く、鯨の肉

は赤く、庖刀をば持つて、呼賣つてゐるといふ樣で、鯨賣の勇ましげな趣である。

水鳥や提灯一つ城を出る

水鳥が居る。提灯が一つお城を出て來るといふので。これは城のお濠に水鳥が騒ぐのが聞える、彼方の大手の門をば提灯をさげて人が出でくる。其灯影が池にうつるといふやうな淋しい客觀の景色である。提灯一つ城を出ると云ひ、人が出るとは言はぬ。從つて人影は見えず、專ら提灯のみが目についたのである。故に此提灯は遠くで、小さく見えてゐるので、いよ〳〵淋し味を加へたのである。

西吹けば東にたまる落葉哉

西吹けばとは西風が吹けばで、西風が吹くと東の方へ落葉が溜る、即ち吹よせられる。といふたので、何んでもなき事のやうぢやが、

反對に東が吹けば西にたまるといふ事を現してゐるので、此の句は餘り廣からぬ庭などの樣で、落葉が西の方に溜つてゐたのが、西風が吹いて東へ溜る、さうかと思ふと東風が吹けば西へ溜る。風の方向のまに〳〵落葉がアチコチしてゐる。といふ長き時間を含んでゐる。從つて此庭は荒れたる儘に、落葉も拂はずに打すてある事が明かである。冬のさびしく荒れた庭の趣である。

茶の花や石をめぐりて路を取

茶の花が咲いてゐる、其處には石があつて。其石をまはつて道を取り、道が出來てゐるといふので、これは少し場合が明かでない、即ち石は一つであるか、數多であるか、其石と茶の花の位置關係はどうであるか、其邊が少しも判然しない。石が一つで大きいのぢやとすれば、泉水などの景色、小石とすれば山道などの景色であるが、

作者は多分茶畑に大なる石があつて、其石から道が曲つてゐるやうな景色を歌つた積りであらう。

枇杷の花鳥もすさめず日暮たり

すさむはこゝでは賞翫の意である。枇杷の花がさいてゐる、それをば鳥も賞翫せず、其花に遊びもせず、日が暮れてしまつたといふので、枇杷の花のさむしき佗しき趣を歌つたのである。

人々高雄の山ふみして一枝の丹楓を贈れり、頃は神無月十日まり老葉霜に堪えずやがてはら〳〵と打ち散りたることにあはれふかし

爐に燒て煙を握る紅葉かな

自分の知る人々、仲間のものたれかれが、京都の西なる高雄山へ遊

びに行つて、其土産に一枝の丹色に染つた楓を贈つてくれた。其時は神無月即ち十月の十日餘りであつた。老ひたる葉は霜に堪えずやがて間もなくはら〳〵と散つてしまつたのが、殊に哀れ深く感じたといふ前置。

句の意は、紅葉をば爐へくべて、それから立昇る煙を握つた、左樣な紅葉ぢやといふので、即ち前置の散つてしまつた紅葉で、生けて賞することが出來ず、爐にくべて、せめて其煙を握つて心をやつた事ぢやといふのである。煙を握るなどは神韻的である。

斧入れて香に驚くや冬木立

冬木立を伐倒さうと思つて、斧を入れた、所がよき香りがした、それに驚かされたといふので、葉が落ちて枯れた木であるから、何の木ともわからず、薪にすべく伐らうと斧を打込むと香りが高い、オ

ャ、此木は何々といふ名木ぢや、伐るのではなかつたにと思つた時であらう。

寒梅や梅の花とは見つれども

寒梅即ち冬さく梅が咲いてゐる。これは梅の花であるとは見たが、さて實際梅であるのかしら、梅のやうぢやが又梅でもないやうであると、寒梅の春の梅と異つた趣ある所を打興じたので、彼の阿陪の宗任に梅を見せて、これは何といふかと聞いたら『我國の梅の花とは見つれども、大宮人は如何いふらんと』答へたと傳へられてゐる。其歴史の言葉をかり來つて斯く叙したので、洒落氣味である。

早梅やお室の里の賣屋敷

早梅は早く咲く梅、即ち冬の内にさく梅である、それが咲いてゐる其處は京都の北西、御室の里で、賣屋敷の内ぢやといふので、住み

荒らしたる家の、冬枯れたる庭に、早梅の二三輪、さびしく咲いてゐる客觀の景色。

草枯て狐の飛脚通りけり

冬も深く總ての草が枯れた。其時に狐が飛脚に化けて通つたといふので、果して狐が化けてゐるのか否かわからぬが、其のいそ〳〵と寒げな飛脚の趣が、恰も狐の化けてゐるかの如くであるので、それを直ちに狐の飛脚ぢやと切言したまでゝあらう。

寒菊やいつを盛りの莟がち

寒菊は寒中に咲く菊である。其菊の樣を見ると、莟勝ち即ち莟の方が多くて、花は少ないあれは何時が盛時であらう。盛りとして全部は莟が咲き揃ふ事があるのであらうか、心元ない樣であるといふのて、寒菊のあはれげな淋しき趣をうたつたのである。

琵琶の畫賛

撥音に散るは壽永の木葉かな

琵琶の圖に賛するといふ前置。

琵琶をひく撥の音に散るのは、壽永の年號の時の木の葉であるといふので、壽永は平家の亡んだ時、琵琶は平家物語に合せて彈く所から平家滅亡を思ひ出て、今此の琵琶の撥音には、木の葉が散る事である、其木葉は今日の木葉ではない、壽永の昔の木葉が散るのである、平家の亡んだ時の木葉が散るのぢや、と云ひて琵琶の繪畫に對し、左樣なあはれな悲しき音を出す事だらうと言つたのである。

なまこにも鍼試むる書生かな

これは醫師、昔しの漢法醫師の書生の事を云つたので、當時の醫者は鍼灸などをやつた、其處で醫者のまだ書生が、海鼠に鍼を試みて

見たといふので、滑稽の句である。

島山や夜着の裾より朝千鳥

此句は海樓に泊した時の句と見える。即ち樓の障子をあけてゐる。朝日がさし込んでゐる。自分は未だ床から出ない、寐た儘で海の方を望むと、島の山が見える併し海は眼界下で見えぬ。不圖千鳥が飛びすぎた。それが恰かも自分の着てゐる夜着の裾あたりから飛び出したやうであつたといふやうな場合ぢや。

乾鮭の片荷や小野の炭俵

乾鮭は干した鮭、今日の鹽鮭より未だ一層干からびてゐるもの、それを片荷にし、片方には小野といふ所の炭俵をつけてゐるといふので、小野は京都の西の田舍。て此句は小野の炭賣が京都市へ出て炭をひさぎ、其空俵を片荷にし、片荷に乾鮭を買つたのをぶらさげて、

とぼ〳〵と歸つて來るのであらうと思ふ。

續蕪村俳句評釋

大尾

明治四十一年六月十日印刷
明治四十一年六月十日發行

續蕪村俳句評釋
正價貳拾錢

著作者　寒川陽光

發行者　東京市神田區錦町二十一番地　岩崎鐵次郎

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　山田義清

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

發兌　東京市神田錦町二十一番地（電話本局三〇六七番）振替貯金口座番號四五一七　大學館

著作權所有

初學俳句叢書

- 内藤鳴雪翁題 寒川鼠骨君著 第一編 運座必携 俳句會必用全集 郵價二十四錢
- 内藤鳴雪翁題 寒川鼠骨君著 第二編 四季分類 芭蕉蕪村俳句全集 郵價二十四錢
- 内藤鳴雪翁題 寒川鼠骨君著 第三編 四季分類 芭蕉七部集俳句全集 郵價二十四錢
- 内藤鳴雪翁題 寒川鼠骨君著 第四編 四季分類 芭蕉十哲全集 郵價二十四錢
- 内藤鳴雪翁著 第五編 春夏 蕪村七部集俳句評釋 郵價二十四錢
- 内藤鳴雪翁著 第六編 秋冬 蕪村七部集俳句評釋 郵價二十四錢
- 寒川鼠骨君著 第七編 春子規、鳴雪、夏碧梧桐、虚子、秋子規、鳴雪、冬碧梧桐、虚子 明治四大家俳句集 郵價二十四錢
- 寒川鼠骨君著 第八編 春夏 明治名家俳句集 郵價二十四錢
- 寒川鼠骨君著 第九編 秋冬 明治名家俳句集 郵價二十四錢
- 寒川鼠骨君著 第十一編 春夏 子規俳句集 郵價二十四錢
- 寒川鼠骨君著 第十二編 秋冬 子規俳句集 郵價二十四錢
- 寒川鼠骨君著 第十三編 春夏 古今滑稽俳句集 郵價二十四錢
- 寒川鼠骨君著 第十四編 秋冬 芭蕉十哲俳句評釋 郵價二十四錢
- 寒川鼠骨君著 第十五編 芭蕉十哲俳句評釋 郵價二十四錢

- 文學士沼波瓊音先生序、池田錦水先生著 獨習自在 川柳入門 野口寧齋先生序、宮崎來城先生著（再版） 郵價二十四錢 稅十五錢
- 漢詩自在 作詩術 井口駒北堂著 郵價三十六錢 稅三十錢
- 白樂天傑作 琵琶行評釋 大橋直哉先生著 郵價十四錢 稅十錢
- 青年明吟 著名漢詩評釋 信夫恕軒翁序、岩井松風軒先生著（六版） 郵價十二錢 稅十三錢
- 長恨歌評釋 室直哉先生著 郵價廿四錢 稅廿四錢
- 漢詩入門叢書 第一編 作法詳解 漢詩獨習 郵價廿四錢 稅廿四錢
- 漢詩入門叢書 第二編 古城貞吉先生序 駒北堂主人著 白樂天詩集評釋 郵價廿四錢 稅廿四錢
- 漢詩入門叢書 第三編 子爵戸田忠義君題 駒北堂主人著 李太白詩集評釋 郵價廿四錢 稅廿四錢

俳句入門叢書

正價各十錢　郵税各四錢

第一編　**俳句獨習**　内藤鳴雪翁著（八版）

第二編　**蕪村俳句評釋**　佐藤紅緑君著（四版）

第三編　**其角俳句評釋**　河東碧梧桐君著（參版）

第四編　春夏　**芭蕉俳句評釋**　内藤鳴雪翁著（三版）

第五編　秋冬　**芭蕉俳句評釋**　内藤鳴雪翁著（三版）

第六編　**俳句新歲事記**　寒川鼠骨君著（五版）

第七編　春夏　**大家模範俳句集**　内藤鳴雪翁題、寒川鼠骨君（參版）

第八編　初學自修　**俳句案内**　内藤鳴雪翁著（再版）

第九編　**七部集俳句評釋**　内藤鳴雪翁、寒川鼠骨君共選（再版）

第十編　秋冬　**大家模範俳句集**　寒川鼠骨君著（再版）

第十一編　大家苦心　**俳句錬習談**　寒川鼠骨君著

第十二編　**明治大家俳句評釋**　内藤鳴雪翁　寒川鼠骨君共選（三版）

河井醉茗君序　川脇世外君著

新體詩作成自在

佐々木信綱先生題　文學士佐藤芝峯先生序
文學士　武島羽衣先生序　鹿島櫻巷先生編

價二十錢　郵税四錢

名家　**模範新體詩集**

本書は現代卓越せる新體詩家、蒲原有明、薄田泣菫、平木白星、馬場孤蝶、上田萬年、尾上紫舟、岩野泡鳴、與謝野鐵幹等數十氏が春、夏、秋、冬、戀、別離、哀傷、羈旅、詠物、歴史、雜等十餘題に渉る傑作殆んど百有餘篇を蒐めたるもの、新體詩研究者座右の寶典なり

文學士　大町桂月先生序、鹿島櫻巷先生著

作法詳解　**新體詩獨習**

本書は著者多年研究の結果用意周到なる筆を以て明治國詩たる新體詩の性質を明にし其作法に就いて諸多の參考書に依り或は文章を新體詩となす手段、叙景、抒情、叙事各體に就いての作、法凡て傑出せる作例を擧げてこれを指示し用語辭句を網羅せる等親切叮嚀の獨習書なり。

佐々木信綱先生閲　千勝藏重先生著

價二十錢　郵税四錢

額題　**萬葉短歌全集**

◎萬葉集は萬葉假名と稱する眞字を以て書かれたれば閲讀に不便を感ず依て本書は普通文字に改めて破究の便を圖る◎本書は四季、戀、雜の三篇に分ち更にこれを諸部類に分類せり。

價二十五錢　郵税六錢

前華族女學校講師　近藤正一先生著

百人一首詳解

佐々木信綱先生閲　千勝義重先生著

郵税　十三錢　四錢　價

三十六歌仙集評釋

本書は柿本人麿、山部赤人、在原業平、小野小町、を始め三十六歌仙集の和歌を評釋し、評論せり、且つ小傳を記して歌仙の和歌人物を知らしむ。

文學博士　木村正辭先生題　千勝義重先生著

郵税　四十錢　八錢　價

類題萬葉集評釋

萬葉集の和歌は難解にして國文を學ぶもの、常に難ずる處なり本書は眞字を普通の假名に改めて四季に類題を分ちて平易に釋義を試み且つ評言を加へたる珍書なりとす。

佐々木信綱先生題　千勝義重先生著　（三版）

郵税　二十錢　四錢　價

西行法師山家集評釋

目次を摘記すれば法師の略傳、俗にありし時の法師、脫俗後の逸事、當時の歌壇に於ける西行、西行自身の歌に對しての考、西行の詞藻、西行法師の自讃歌、閑寂の趣清逸の氣に富める幽趣にして高致なる歌、纖麗巧緻なる歌とりく〳〵にをかつ歌調を評し語句を釋き、春夏、秋冬、戀、無常、神祇、釋教、祝賀、贈答悉く正確なる原本に依て、最も平易に全集を評解す。

姫河原無鳴君著

郵税　二十錢　四錢　價

新派和歌評釋

桂湖村先生題　井口駒北常著

漢詩入門幾書第四編

杜子美詩集評釋

河村北溟先生著

郵税　廿四錢　五錢　價

和漢名家歸省詩評釋

河村北溟先生著

郵税　十四錢　五錢　價

和漢名家懷鄕詩評釋

長田偶得先生著（肖像畫蹟入）（三版）

郵税　十二錢　三錢　價

文天祥藤田東湖正氣歌評釋

石橋玄潮君編（五版）

郵税　二十四錢　二錢　價

韻文地天月花

緒方流水君序、石橋玄潮君著（四版）

郵税　二十四錢　五錢　價

新體詩指南

伊藤銀月君序　伊藤天籟君筒

郵税　三十六錢　十錢　價

思潮大景文士寶典

河東碧梧桐君著

郵税　三十六錢　五錢　價

新俳句研究談

文學士辰巳小次郎先生序、岩井松風軒著
遊仙窟評釋 價二十五錢 郵稅四錢

井口紫濤先生著 美文韻文
和漢朗詠集評釋 價二十五錢 郵稅四錢

興謝野鐵幹先生題、鹿島櫻巷先生著 名家
模範新派歌集 價廿五錢 郵稅四錢

興謝野鐵幹先生題、姫河原無鳴先生著 作法詳解
新派和歌獨習 價二十錢 郵稅四錢

伊藤銀月先生評、百字文會本部編 傑作細評
模範百字文集 價三十錢 郵稅四錢

井口紫濤君著 明治文學
大家美文資料 價十五錢 郵稅四錢

柳川春葉先生序、三津木春燈、井口紫濤兩君著 泰西文學
美辭資料 價十八錢 郵稅四錢

文學士 美文資料 栗田木岡君序、波邊幾石君著
美辭麗句 價十五錢 郵稅四錢

東京帝國大學教授文學博士芳賀矢一先生序 法學士 俣重節村先生編 名家傑作
模範紀行文集 價三十錢 郵稅六錢

名家文庫 第一編 美文散文
白砂青松 價二十五錢 郵稅六錢

名家文庫 第二編 美文散文
清風明月 價二十五錢 郵稅六錢

名家文庫 第三編 美文散文
巖下滴泉 價二十五錢 郵稅六錢

名家文庫 第四編 美文散文
水村山郭 價二十五錢 郵稅六錢

名家文庫 第五編 美文散文
紅葉青山 價二十五錢 郵稅六錢

名家文庫 第六編 美文散文
江山烟雲 價二十五錢 郵稅六錢

名家文庫 第七編 美文散文
閑雲野鶴 價二十五錢 郵稅六錢

名家文庫 第八編 美文散文
雪裡野梅 價二十五錢 郵稅六錢

木村鷹太郎先生著（バイロンの肖像數葉、愛人愛子墳墓寫眞）

バイロン 文界の大魔王

價四拾錢 郵稅六錢

著者の序に曰く「バイロンの偉大なる天才に對して無限の敬意を表し、其詩の美と力と大とを愛し、其社會より受けたる迫害に同情の涙を濺ぎ、其イタリアに於ける義俠の精神に感じ、劍を杖きてグレシアの獨立戰爭を援け、光榮ある死を遂げたる其英風を欽し、弦に此册子を著はす」

以て著者の意氣を見るべく、著者の價値を見るべし、英國に於ける詩人バイロンには遺傳幼時學校生活旅行、結婚離婚、婦人の關係、英國訣別外國に於けるバイロンはスキツソル、ゼネチア、ラエンナ、ピサゼノア諸國の生活、バイロンの思想文學哲學には天地觀及び自我論、不平及厭世、人道と耶蘇教との衝突、快樂主義、女性及び戀愛觀、道德觀、海賊及びサタン主義、英雄バイロンには、イタリアの秘密政黨及グレシアの獨立戰爭、バイロンの死、バイロンの人物及び文學概評を擧げ、終りにバイロン年譜を掲ぐ。

253
760

兒玉花外君選

青年新體詩集

價二十錢
郵税四錢

本集は現代青年新體詩家の苦心の作にかゝる佳篇を選者が嚴密なる批評の下に集錄せるものにしてなり、著者の序に曰く「之れ青年詩人が心血の凝塊なり、生命の發揮なり、蠟の手に彩管を握つて天下に雲の如く起りたる多くの詩歌を見よ、人民よ爾等の上に降したる露と雨と虹と而して赫奕たる大光明を視よや」と本書の眞價値はこれに盡きたりといふべし。

古賀圓藏君著

泰西名家

キツス詩集

正價十八錢
郵税四錢

東京大學館發行

087533-000-3

特63-112

蕪村俳句評釈 (続)

寒川 鼠骨／著

M41

DBE-0903